



## ■ 多言語化木簡解説リーフレット 作成の試み

文化庁による文化財多言語解説整備事業の一環として、都城発掘調査部史料研究室の協力を得て、奈文研における主な研究テーマの一つである木簡を対象に、英語・中国語(簡体字・繁体字)・韓国語による新しいリーフレットを作成しました。はじめに研究員が集まり、ブレインストーミングをおこない、次のような方向性を決めました。  
①異なる言語文化圏から平城宮跡資料館を訪れる方のために、それぞれの言語文化圏に親和性が高いように、各言語版のリーフレットを異なる内容・デザインにすること。  
②持って帰りたくなるようなリーフレットを目指し、形の面も工夫し、変わったギミックで来館者がアッと驚き、楽しめるものを作ること。  
③各言語ごとに、木簡の解説を担当する研究員を決め、3名の多言語化担当研究員と共同で作業にあたり、各言語にもっともふさわしい内容を模索し、それぞれの世界観を表現すること。

試行錯誤を重ねた末に、当初構想したとおり、遊び心満載な、内容も形も全く異なる3種類のリーフレットが完成しました。

英語版は「フラッパー」という特殊変形印刷を探用し、ページをバタバタめくると、木簡調査研究の流れや研究における木簡の削りくずの重要性の解説が四コマ漫画風に現れます。フラッパー印刷では写真とテキストの配置が制限されるうえ、各ページの内容をつなげる必要があるため、どう話を展開するか、非常に悩みました。最終的にでき上がったのは、最小限のテキストで木簡の鮮やかな写真を生かしたデザインに仕上りました。

中国語版は木簡を収蔵する桐箱を彷彿させるデザインになっています。木簡の豆知識クイズを解きながら、六角形のページを花弁のように開いていくと、

最後に「宝」が現れます。さらに、リーフレットのQRコードを読み込めば、奈文研プロジェクトから各木簡の詳細情報を書いた中国語版解説シートをダウンロード・閲覧することができます。

韓国語版は、貴族邸のコース料理をイメージした優雅なデザインに組み上げています。日本の古代料理を紹介し、日韓両国の食べ物にみられる共通点などを伝えることによって、日本の食文化に対する理解を深め、より親しみが感じられるようにすることを目指しました。表面には再現された古代料理の写真を載せ、それぞれの食材にまつわる伝承や韓国料理との共通性を紹介しました。裏面は、わかりやすい説明を入れるとともに、かわいいイラスト等でポップな雰囲気を醸し出しています。

日本語を母語とされない方に効果的に日本文化を伝えるために、今回のリーフレットは従来のやり方にこだわらない方針で挑みました。研究員の間で様々な意見が飛び交い、新しいアイディアや提案を積極的に取り入れ、制作過程を通して、お互い成長し理解が深まったと実感しています。創意工夫が詰まった多言語化木簡解説リーフレットを、多くの来館者に手に取っていただき、木簡をはじめとする奈文研の研究成果への関心を集め、日本文化への興味が一層かきたてられることを期待しています。

(企画調整部 Yanase Peter・吳修喆・扈素妍)



新しく作成した多言語化木簡解説リーフレット



## 発掘調査の概要

### 藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第205次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、昨年5月から12月まで、藤原宮大極殿院東北部において発掘調査を実施しました。11月7日（土）に現地見学会を開催したあとは、藤原宮造営期の遺構の状況確認を目的に調査を進めました。

造営期の遺構の中で特筆すべきは、東面回廊基壇の下からみつかった2本の木杭です。この杭は、基壇を造る前に地面に打ち込んだもので、基壇を造る時には上部を折り取って、その上に基壇土を積んでいました。杭は直径が4～5cmと細いですが、2本のうち1本は、長さ80cmほどが残っていました。

杭の位置は、南北に延びる東面回廊の棟通りの真下にあたり、みつかった2本の杭を結んだラインは、回廊の中軸ラインとほぼ一致します。このような検出状況・位置を考慮すると、これらの杭は、大極殿院の回廊の位置を設定する際に使用された基準杭であった可能性があります。今回検出した2本の杭は、10mほど離れていましたが、同じような杭をある程度の間隔を空けて打ち、それらを基準として回廊の基壇の幅等が決められたと考えられます。

このような杭は、藤原宮の過去の調査では確認されていません。今回みつかった2本の細い杭は、古代の宮殿建築の造営方法を具体的に示す貴重な証拠といえます。（都城発掘調査部 若杉智宏）



回廊の基壇の下からみつかった杭（北東から）

### 藤原京左京三条三坊の調査（飛鳥藤原第204-6次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、個人住宅の建設とともに、藤原京左京三条三坊東南坪、西南坪の発掘調査を実施しました。これまでの周辺での調査成果から、調査地では東三坊坊間路の両側溝や弥生時代の遺構の検出が想定されました。調査区は、東西14.5m、南北3mで設定しました。調査期間は10月7日から10月26日までです。

調査の結果、藤原宮期の遺物廃棄層、東三坊坊間路の両側溝、古墳時代前期の柱穴、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての沼状遺構、弥生時代後期の素掘りの井戸を確認しました。

藤原宮期の遺物廃棄層は炭と大量の土器を含み、これらは東三坊坊間路西側溝の埋没最終段階に捨てられたものです。土器は藤原宮期の須恵器と土師器で、完形に近いものもあります。このことから近辺に宮期の遺構が広がっている可能性があります。

東三坊坊間路の東側溝の幅は約1.0m、深さ約30cmです。一方の西側溝の幅は1.5～2.0m、深さ約30cmです。東三坊坊間路の路面幅は5.5～6.0mと考えられます。また、本調査区内では、約150m南方の第63-7次調査のように条坊側溝を埋めたのち、坪をまたいだ土地利用は確認できませんでした。

調査地周辺は藤原宮に接する一等地で、大規模宅地も想定できますが、調査例は多くありません。今後も調査を積み重ねて、周辺の実態解明を進めていきます。

（都城発掘調査部 片山健太郎）



調査区全景（東から）

### 平城宮東方官衙地区的調査(平城第621次)

平城宮内には、内裏や大極殿、朝堂院等とともに、行政の実務をおこなう官衙(=役所)が設置されました。第二次大極殿・東区朝堂院の東側、東院地区との間にまとまって配置された官衙群を東方官衙と呼んでいます。

奈良文化財研究所では、東方官衙地区の様相把握のため、継続的な発掘調査をおこなってきました。昨年度の第615次調査では、官衙城の建物としては特別に大きい基壇建物SB19000を確認し、太政官の弁官曹司と推定しました。これにより大型基壇建物が位置する区画の重要性が高まりました。そこで今年度は、築地堀による区画、石組暗渠や平城宮の基幹排水路SD2700を利用した排水網など、当該区画の使用の実態を、一体的に把握することを主たる目的として、第615次調査区の西側に調査区を設けました。

調査の結果、大型基壇建物が建つ区画の基幹排水路東岸部では、石組と木樋という構造の異なる2本の暗渠を設け、区画内から南北築地堀SC11510をくぐり基幹排水路へ流していたことがわかりました。基幹排水路の西岸部でも木樋や瓦樋を繰り返し設けていることを確認しましたが、西岸部は東岸部に比べ相対的に簡素です。

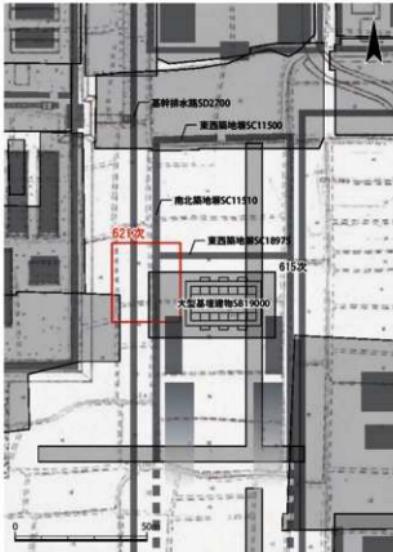
大型基壇建物が位置する東岸部に、より重厚で入念な排水施設を設けている様子があきらかになりましたが、とりわけ石組暗渠は、大型の石材を用いた構造で平城宮でも類例の少ない施設です。これによって大型基壇建物を有する区画の重要性を改めて認識することができました。

また、今回検出した東西築地堀SC18975の位置は、東方官衙地区の北を画す東西築地堀SC11500から

南に約44.3m(150尺)で、第406次調査の成果を裏付けるとともに、大型基壇建物を囲う区画の北限を確定することができました。

基幹排水路からは多くの遺物が出土しました。これらは東方官衙地区の活動や性格を知るうえで基礎的な資料です。今後の整理・検討を精力的に続けていきます。

今回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため現地説明会はおこなわず、YouTube「なぶんけんチャンネル」にて調査の成果を紹介しています。ぜひご覧ください。  
(都城発掘調査部 大澤 正吾)



平城第621次調査区(赤)とその周辺



調査区全景(北から)



木樋暗渠(北)と石組暗渠(南)(西から)



## 平城宮式鬼瓦の復元

蹲踞する鬼神が浮き彫りで表現されたこの鬼瓦（平城宮式Ⅰ式A）は、平城宮造営当初より用いられたものです。現在までに150点弱が出土し、平城宮跡ではもっとも多く出土する型式ですが、そのほとんどは破片で、完形資料は少し表面が磨滅した1点しかありません。復元された朱雀門や第一次大極殿南門の復元にあたっては、情報量の多い完形品のみでなく、表面が磨滅していない状態の良い破片資料をピックアップし、表現の再検討を試みました。

すると、①鬼神の空豆形の目にうっすらと瞳、②上唇上方中央には人中、③手首には手くるぶしが表現されていたことがわかりました。また、膝に置いた手の五本の指は、もともとほぞりと長く表現されていることも判明しました。打ち欠かれていることも多い下部の文様も完全に復元し、下辺中央の半円形抜きを切り取るための印目の段差も復元しました。破片資料の情報を集めることによって、完形品を補って余りある表現を再現することができます。

朱雀門の復元から20余年。第一次大極殿南門では、より奈良時代の姿に近づいた鬼瓦がその屋根を護ります。

（都城発掘調査部 岩戸 晶子）





## ■ ウィズコロナ社会での文化財をめぐる国際交流

新型コロナウイルス感染症が世に知られてから1年余り、この間、私たちが本務とする文化財の調査や保護のための国際交流のあり方には、大きな変化がありました。従来おこなってきた海外の様々な調査・修復現場での活動や、国際会議での各国の専門家との意見交換が、一切できなくなってしまったのです。

当初は渡航の再開を期待しつつ、現地での作業を遅らせて対処をしましたが、初夏には「海外に渡航しない国際交流」へと舵を切らざるを得なくなりました。様々な事業をすべてオンラインでおこなう、という方針です。例えば、文化庁の委託による「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」については、事前に教科書をデータで配信した上でのオンラインセミナーを2度、開催しました。

もちろん、オンラインでの交流は、対面でおこなうものと同等ではありません。しかし、限界にばかり目を向けているよりは、むしろオンラインならではの利点を考えるほうが生産的です。例えば、上記のセミナーには、広大な面積をもつカザフスタンの各地から、多くの研究者が参加してくれました。移動距離やコストを考えると、対面でのセミナーではこれは難しかったでしょう。カザフスタン国内の研究者間での情報交換が進んだ、という嬉しい感想も聞かれました。

私たちは今後も、今できることを最大限におこない、日本の技術の海外移転や、学術交流を通じた国際親善の促進に努めていきます。

(企画調整部 庄田慎矢)



オンライン会議システムを利用したカザフスタン国立博物館との技術移転セミナー

## ■ 被災装飾古墳の保全に関する取り組み

熊本、大分両県に甚大な被害を引き起こした2016年の熊本地震によって、熊本県下の装飾古墳もまた大きな被害を受けました。石室を構成する石材がずれ動いたものや、石室を覆う盛土に亀裂が入り、雨水が浸透するようになったものも見られました。このような盛土の被害に対して、雨水の浸透を抑えるために、防水シートを用いて墳丘を覆う応急処置がとられた古墳も少なくありません。

一般に古墳の盛土は、その荷重によって石室の石材が横へずれないよう構造的な安定性をもたらすだけでなく、石室内部の温熱環境を安定させる重要な役割を担っています。例えば、真夏の厳しい日射が墳丘に照りつけたとき、盛土の中に含まれる水分が蒸発することで、日射による熱の一部が蒸発潜熱として放出され、石室内部への熱の供給量を低減する働きがあります。ところが、墳丘を防水シートで長期間覆い続けてしまうと、この潜熱による熱の放出ができず、やがては石室内部の平均温度の上昇を引き起こす可能性もあります。こうなってしまうと、石室内部では例えば過剰な結露が生じたり、あるいはカビのリスクが増大したりと、保存環境の悪化を引き起こしかねません。そこで、現在、熊本県内の自治体と協働して、被災装飾古墳を対象とした石室内部の温湿度測定をおこない、それらの保存環境をモニタリングしています。さらに、熊本市、京都大学と合同で、熊本市内に位置する装飾古墳を対象として、盛土を覆うシートに透水性のあるものを用いた場合、雨水の浸透抑制と石室内部の環境安定にどれほど効果があるか調査を実施しています。

(埋蔵文化財センター 脇谷草一郎)



透水性シートで保護された墳丘

## 天平人の盤上遊戯「かりうち」 テストプレイを実施

奈文研では「平城宮跡の活用の実践的研究」として、奈文研の調査成果を活かし、平城宮跡来訪者に遺跡博物館ならではの体験を提供できるよう、企画検討を進めています。その企画の一つに、天平人の盤上遊戯「かりうち」体験があります。

「かりうち」とは、奈良時代に遊ばれていた双六に似たボードゲームで、平城宮・京跡のほか全国各地の遺跡から出土した土器に、その盤面となる記号が記されていることがわかり、古代日本で広く遊ばれていたと判明しました。「かりうち」に関する奈文研の研究成果は、奈文研リポジトリに資料が公開されていますので、ぜひご覧ください。

この「かりうち」という遊びを復元して、平城宮跡で大会を開催しよう！という野望を実現すべく、今年度より企画開発が始まりました。「かりうち」ではサイコロの代わりに、4本の棒(かり)を投げてその目の数だけコマを進めます。これらの道具が現代人にとって使いやすくなれば、ゲームは普及しません。また、ルールをわかりやすく伝えるためのルールブックの作成も大きな課題です。

そこでそれらの試作品を用意して、11月11日(棒が4本のかりうちの日)に、第1回テストプレイを実施しました。奈文研職員のほか、NPO平城宮跡サポートネットワークや平城宮跡管理センターの皆様もご参加くださいました。様々な試作品をテストし、その使用感等を評価してレポートに記載いただきました。忌憚のないご意見・応援の声を賜り、感謝申し上げます。平城宮跡にかりの音が響くその日まで、どうぞお付き合いください。

(文化遺産部 高橋 知奈津)



かりうちテストプレイの様子

## 皆様に感謝

私の「こだわり」は、「こだわらないこと」ですので、この3月31日も、これまでの異動日とあまり気分はかわらないというのが正直なところですが、さいごに一言申し上げます。

1986年1月1日付で研究所に奉職以来、平城宮跡発掘調査部、飛鳥藤原宮跡発掘調査部、文化庁、平城宮跡発掘調査部、文化遺産部、文化庁、文化遺産部と渡り歩き、奈良文化財研究所で25年間、文化庁で10年間お世話になりました。

その間に、なかなか行けないような場所に行き、できないような経験をし、みられないようなものを見させていただき、感謝しています。

未だ治安の安定しないアフガニスタンへ行く時には、職場の机を空っぽにし、ある程度のことを覚悟したこともありました。様々な経験は、私にとっては適度に刺激的であり、充実した35年間を過ごすことができました。

今、35年間をふりかえり、それぞれの経験は良い思い出だったと言いたいところですが、具体的に思い出すと、それぞれの局面で、ああすれば良かった、こうすれば良かったとの思いばかりが浮かんできます。

結局のところ、成長できずじまいでの年を迎えることとなりました。それでも、無事？定年を迎えることができましたのは、文化財業界でご縁をいたきました諸先輩方、同輩の方々、後輩の方々のおかげと感謝しております。

今後も、この業界にいる間は、皆様に迷惑をおかけするかもしれませんのが、これまでどおり、どうぞよろしくお願ひいたします。

(文化遺産部 島田 敏男)



建造物調査の様子(写真中央 筆者)

## 飛鳥資料館 展示品紹介 「石造露盤石 定林寺出土」

飛鳥資料館の第一展示室では、昨年度から定林寺の露盤石を展示しています。露盤とは、屋根の頂部にのせる方形の平らな台です。現存する塔の露盤はほとんどが金綱製ですが、飛鳥時代には石製のものがつくられました。

定林寺は明日香村立部にある7世紀前半に創建された寺院です。現在の本堂の西側に、飛鳥時代の堂塔の跡が残っています。

定林寺の露盤石は、兵庫県高砂市で採れた竜山石（流紋岩質凝灰岩）でつくられています。竜山石は二上山の凝灰岩等に比べると加工が難しい硬質な石です。飛鳥では、飛鳥大仏の台座や山田寺金堂の礼拝石等に使われました。

展示している定林寺露盤石は半分近くが欠損していますが、それでも大人4人がかりで苦労しながら移動させて展示しました。重量感ある露盤石から、飛鳥時代の塔の姿や、当時の建築技術に思いをはせてみて下さい。（飛鳥資料館 西田紀子）



定林寺の露盤石

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）／休館日：月曜休館（月曜が休日の場合は翌平日）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎ 0744-54-3561

## 平城宮跡資料館 春期特別企画展

### 「平城宮跡保存運動のさきがけ 一大極殿標木建設式120周年—」

平城宮跡は都が京都に遷って以降、長らく田畠になっていました。明治時代、その平城宮跡の保存運動を進めた人物としては、奈良の植木職であった棚田嘉十郎が知られています。しかし、保存運動の口火を切ったのは、地元である当時の郡藤村の有志たちによる運動でした。

保存運動のはじまりは、明治34年（1901）4月3日、第二次大極殿上に標木を建設したことです。平城宮跡は明治時代まで一般にはほとんど知られていませんでしたが、研究者によりその保存状態の良さが指摘されます。そこで地元の人たちが保存・顕彰しようとして、自ら標木を建設したのです。

近年、地元の旧家から当時の関係史資料が発見されました。今年は、その標木建設からちょうど120年目にあたります。その節目の年に、標木建設とその後の史資料を展示し、平城宮跡の歴史に思いをはせていただければ幸いです。

（文化遺産部 吉川聰） 発見された明治34年・43年の標木



会期：2021年4月29日（木）～5月30日（日）／休館日：月曜休館（月曜が休日の場合は翌平日）

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

## ■ お知らせ

### 平城宮跡資料館 春期特別企画展 同時開催

4月29日（木）～5月30日（日）

「平城宮跡保存運動のさきがけ

—大極殿標木建設式120周年—」

「大地鳴動—大地の知らせる危機と私たちの生活—」

### 飛鳥資料館 ミニ展示

4月23日（金）～5月16日（日）

「新収蔵品紹介—「呉」と書かれた瓦—」

### 第19回平城宮跡クリーン大会

4月3日（土）

朱雀門ひろば 9:30集合（申込不要）

## ■ 記録

### 平城宮跡資料館 新春ミニ展示

1月5日（火）～1月31日（日）

1,425名

「平城京の丘」

## 飛鳥資料館 冬期企画展

1月22日（金）～3月14日（日）

2,371名

「飛鳥の考古学2020」

### 平城宮いざない館 展覧会

1月23日（土）～3月28日（日）26,024名（3.18現在）

「鬼神乱舞—護る・祓う 鬼瓦の世界—

Legend of Exorcism」

### 第67回文化財防火デー トークイベント ライブ配信

1月30日（土）13:30～14:40

「災害からまもろう！私たちの文化財」

### 研究集会

2月9日（火）10:30～16:50

オンライン配信

「水中遺跡保護行政の実態Ⅲ」

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール [koho\\_nabunken@nich.go.jp](mailto:koho_nabunken@nich.go.jp)

発行年月 2021年3月